

ICN 報告

2021 年国際栄養学会議誘致の報告

ICN2021 誘致準備ワーキンググループ 座長
加藤 久典

他国との厳しい誘致競争の末に、2021年の第22回国際栄養学会議（International Congress of Nutrition, ICN）が東京で開催されることが決まりました。このような大きな国際会議の誘致は、我々学会関係者にとって滅多にないことと思います。誘致成功までの経緯を記録して、その経験を将来にも活かしていただくと良いという声に関係者の間に強くあり、本稿を準備させていただきました。長くなるのはご容赦いただき、筆者としては取りあえず最後の感想だけでもご覧いただければ幸いです。

1. 意思決定から Bid paper 提出まで

(1) IUNS からの連絡：2012年8月17日に、IUNS(国際栄養科学連合^{*1})より、2021年の第22回ICN開催の意思がある場合は9月17日までに書類を送付するようとの連絡があった(2013年スペイン、2017年アルゼンチンでの開催が決定済み)。

(2) 誘致に向けた決定：日本学術会議 IUNS 分科会^{*2}の清水誠委員長が日本栄養・食糧学会(以下本学会)等の関係学会と相談し、bid paper(誘致提案計画書)を提出することを決定した。準備は本学会を中心に進めることとなった。

(3) 組織作り：8月23日、本学会国際交流委員長の筆者を座長として、誘致準備WGを組織した。メンバー(敬称略)は、井上和生、加藤久典、岸本良美、木戸康博、清水誠、菅原達也、武見ゆかり、仲川清隆、三浦豊、宮澤陽夫の10名。残された時間はわずか3週間であった。

(4) 開催都市の決定：日本政府観光局(JNTO)と相談し、会議の概要をもとに開催候補都市に提案書の提出を依頼した。9月4日に開催都市を東京に、開催施設候補は東京国際フォーラムに決定し、東京観光財団(TCVB)とスケジュール等相談を始めた。

(5) 関係団体等との調整：提出に関して日本学術会議との調整を進めた。また、東京都知事、観光庁長官、JNTO、TCVBに、招請状や支援レターの発出を要請し、取得した。FANS(アジア栄養学会連合)加盟国へサポートレターの要請をし、スリランカとレバノンから獲得し

た。これらは bid paper に掲載した。

(6) Bid paper の作成と提出：記載する内容(予算、プログラム、日本の栄養学の現状、日本での開催のメリット、招請状など)を決定して、WGメンバーで手分けして文章を作成しTCVBに仕上げさせていただいた。約20ページ、わずか10日で作り上げたことになる。日本学術会議(IUNS分科会)と日本栄養改善学会、本学会の3団体が共同して開催する形とした。9月17日にIUNS分科会委員長よりIUNS事務局宛にbid paperをメールで送付した。

2. 最終候補への選出から出発まで

(1) 最終候補選出の連絡：2013年3月14日に、IUNS事務局より最終3カ国に残ったことの連絡があった。Bid paperを提出したのは7カ国、残った国は、ほかに中国(北京)とアイルランド(ダブリン)であった。同年9月、スペインのグラナダでの第20回ICNの会期中のIUNS総会において、プレゼンテーションを行って、投票により開催地が決定するとのことであった。今後の進め方についてTCVBと打ち合わせた。誘致活動を通じてTCVBの経験にもとづく分析やアイデアには大きく助けられた。

(2) TCVBの助成金申請：国際会議の誘致・開催のためにTCVBが各種補助事業を用意しているとのこと、申請書類の準備を進め、5月初めに提出、3種の助成を受けることが決定した。誘致支援事業として、上限300万円(全体の半分)を活動に使用できることとなった。また、開催が決定した際には、開催支援助成(上限2,000万円)、開催プログラム助成も受けられるという決定もなされた。

(3) 誘致活動資金について：上記助成金以外の誘致活動の資金として、本学会の国際交流活動費を利用するほか、国際学会活動積立資産を一部取り崩して使用することが理事会で承認された。

(4) テーマ、ロゴの決定：会議のテーマを、“The Power of Nutrition: For the Smiles of 10 Billion People”に決定した。ロゴマークは、WG座長の研究室の大学院生

^{*1} 組織名等略語一覧 ACN：アジア栄養学会議、FANS：アジア栄養学会連合、ICN：国際栄養学会議、IUNS：国際栄養科学連合、JNTO：日本政府観光局、PCO：professional congress organizer、TCVB：東京観光財団。

^{*2} IUNSの日本の加盟団体は、日本学術会議であるが、日本学術会議内の農学委員会・食料科学委員会合同IUNS分科会がIUNSへの対応を決定している。2013年9月現在委員は7名。

に案を作ってもらい、東京タワーとスカイツリーを融合させたモダンなデザインが採用された。

(5) 情報収集と誘致戦略決定：IUNS の情報が掴めないこともあり、IUNS の有力者を招へいすることを計画した。本学会の大会（第67回名古屋）に講演者として来ていただくことにした。コンタクトを取ったうち、4月1日にIUNSの事務局長から承諾を得ることができた。航空券代はJNTOに負担いただいた。5月25日の名古屋での講演の前に東京で会場の視察などをしていただき、誘致におけるアドバイスなどいただいた。名古屋でも誘致関係者との会合を持った。得られた貴重な情報をもとに、TCVBを中心に今後の戦略を練った。

(6) PCO 選定と制作物準備開始：特に制作物の準備はWGだけでは手が回らないので、PCO (professional congress organizer) にも加わっていただくこととし、誘致活動PCOを選定した。実務的な部分は、都内のWGのメンバー、TCVB、PCOからなるコア作業グループが引き受け、制作作業に着手した(写真1)。

(7) 省庁からの支持レター獲得：JNTOに窓口になっていただいて進めた。まず厚生労働大臣から招請レターを出していただき、その後内閣総理大臣からのレターも獲得できた。

(8) 各国への再度の支援要請：主にアジア栄養学会連合(FANS)のメンバー国を対象に、支持レター提供や支持の意思表示のお願いを繰り返した。韓国、台湾、オーストラリアから支持レターを獲得し、これらをbid paperに追加した。また、関連の国際会議等に参加する関係者をお願いをして、積極的に情報収集や支持の依頼をしていただいた。

(9) プロモーションビデオ作成：前回のIUNS総会の様子等から、プレゼンテーションには印象深いビデオが不可欠であること、それも既存の観光ビデオ等ではなく、オリジナル性の高いものが標準となっていることがわかってきた。ビデオ制作は、3月から打合せを始め、5

月に制作会社の選定をして、内容を詰めていった。全てオリジナルのものを作るのは費用が膨大になるとのことで、TCVBから提供していただいた既存の映像をベースに、足りない部分は写真素材を購入する等工夫したが、“食”に関する部分は日本の強みを打ち出す最も重要なポイントだと考え、こだわった。研究や食育活動などに関しての映像は、関係各所にご無理を言って提供していただき、また一流の割烹の協力も得て調理シーンを新規撮影し、日本の食文化や研究の奥深さ、懐の広さを映像に盛り込んだ。オリジナルの音楽、プロのアナウンサーによるナレーションも加えて、7月末に編集が完了し、3分間のビデオが完成した。これはYouTubeでも事前に公開することにした。

(10) 最終bid paperの作成：昨年提出したbid paperを全面的に見直し、内容をさらに充実させ、見栄えの良いものを用意することとなった。ダブリンのbid paperがウェブに掲載されているのを見つけ、その体裁の美しさに驚いたこともあって、徹底的にやることになった。表紙は東京国際フォーラムのガラス棟の写真が印象的なスタイリッシュなものに変え、中身は、“Why Tokyo?”に答えるべく、長寿、豊かな日本食、優れた給食や栄養教育制度、機能性食品や先端研究など、日本の強みについて十分な説明を入れた。そして日本や東京の魅力を存分に伝え、そして東京開催の堅実性をわかりやすくアピールすべく、1ページ1ページの内容を吟味していった。特に予算面、若手へのサポート、安全性や快適さなどを中心に、魅力的な文章で説明し、効果的な写真をふんだんに取り入れた。デザインに関しても細部に至るまで何度もやりとりをして、完全に自信のあるものに仕上げた。結果として40ページ以上におよぶ大作が8月末に完成し、事前にIUNS加盟の約80カ国に送付した。

(11) ウェブサイトおよびFacebookページの開設：日本が立候補していることを国内外にアピールするため、ウェブサイトを立ち上げることにした(<http://icn2021.org/>)。しかしライバル国に手の内を明かすことは危険が大きいということで、概要のみを掲載して予算等は出さないこととした。プロモーションビデオは関係者内での評判も高く、これも掲載した。そのほかにはツーリズム関係、日本食の魅力を中心とした。ウェブサイトの公開時期には非常に気を使った。できるだけ早く公開して多くの人に見てもらおうという目的があったが、ライバルが見たとしても対抗策を講じるのに十分な時間がない、というところを見計らって、グラナダ出発の1カ月前をその日とし、各国に連絡をした。一方、国内での応援ムードを高める方策として、誘致応援Facebookページ(日本語)を立ち上げた。これはタイムリーな情報発信、特に若手への情報伝達の手段として非常に有効であったと感じる。また多くの「いいね!」を集めたことは、国内での応援ムードが高まっているという意味で、プレゼンでもアピール材料のひとつとなった。



写真1 制作物 (bid paper, パンフレット, うちわ, 缶バッジ)

(12) 配布物作成：これらと並行して、グラナダで配布するパンフレット (bid paper の抜粋) の制作も行ったが、単なる抜粋ではなく詳細に工夫を加えた。これを1,500部印刷した。また、ギブアウェイとして、うちわと缶バッジを制作した。うちわのデザインは、表面をロゴマークと今回の誘致の基本デザイン (シルエットで表した東京の風景のイメージ) とし、裏面を浮世絵の富士山とした。9月のグラナダは暑いという情報だったのでうちわは有効と考えていたが、実際会場内の冷房が不十分なところもあったので、参加者に好評であちこちでパタパタしていただけて良かったと思う。缶バッジについては、ロゴマークベースにちょっと大きめのものを500個作成し、これも会場内で目立つことを意図した。そのうち、通常のロゴの青色ではなく赤いものも一部作って、日本から参加して誘致に協力いただける方用の特別版とするというちょっとした工夫を加えた。日本をサポートすると言ってくれた多くの他国の方にもバッジを着けていただけたのは嬉しかった。

(13) Japan Night の準備：現地での最後の一押しのために、夕食の会、すなわち Japan Night を計画した。グラナダで評判のレストランを予約し、日本らしいお土産も準備した。Japan Night は、あまり大っぴらにしても逆効果になる可能性がある。日本栄養・食糧学会が主催し、2015年アジア栄養学会議 (12th ACN) への協力をお願いしつつ、ICN 誘致の紹介をする会と位置づけた。問題は誰を招待するかであった。事前に招待状を送るのは、日本へ支持を表明している主にアジアの国の栄養関連学会の代表者、および IUNS 役員のうち日本との交流が深い先生などに絞ることにした。十数名に招待状を送り、約10名から参加の返事が得られた。

(14) ブース準備：IUNS からの事前の情報では、立候補都市には、決められたスペースが与えられて、そこで宣伝活動をして良いということであった。また、12th ACN の宣伝を FANS のブースで行う予定であったので、そこも一部 ICN 誘致にも使えると思い、スペースには問題はないと考えていた。しかし、8月30日になって、中国が独自に展示ブースを借りていることが偶然わかった。そこで本部に確認し、本学会会長に急遽相談して、4,000ユーロのブース借り上げを決定した。これも誘致 WG ではなく、本学会としての出展ということにして、ACN の宣伝にも活用することとした。ブースがまだ空いていて借りられたことは運が良かったが、他の設営備品申込みの締め切りがその翌日であると言われ、胸をなで下ろした。パネル等、ブースのデザインを PCO が超特急で進めた。

(15) プレゼンテーションマテリアルの作成：プレゼンは全部で15分間ということで、座長8分、TCVB3分、ビデオ3分、座長から最後のアピール1分という目安でパワーポイントファイルの準備を進めた。プレゼンは、bid paper のセールスポイントを短時間でいかに効果的

に伝えるかが肝となる。印象的なプレゼンにしようということで、新たな写真を集めたり、メリハリを工夫するなど、最後の最後まで修正を加えて練り上げた。過去および翌年の IUNS 若手リーダーシップワークショップ開催など日本の IUNS への貢献、日本からの今回の ICN への参加者数の多さなども強調することとなった。テーマに因んで、多くの方々に笑顔の写真の提供をお願いし、有効に活用した。

(16) プレゼンテーションの練習：まだ内容が固まっていたわけではなかったが、出発の数日前に、プレゼン等の指導のプロである外国人から3時間余りの指導を受けた。東京オリンピックの招致が決まった直後であり、プレゼンの重要性を再認識していたところで、練習にも熱が入った。

(17) 日本からの参加者の把握：現地での宣伝活動、ロビー活動に、できるだけ多くの方にご協力いただけないかと、日本からの参加者の事前調査を行った。学会事務局へメールでの連絡をお願いしたところ、多くの方から反応があり、協力をお願いできた。これが大きな力を発揮することになった。

3. グラナダでの活動

(1) 現地入りと事前活動：グラナダへは、TCVB から2名、PCO の担当者1名に同行していただけることになった。筆者は IUNS の委員会のために会議の2日前から現地入りをしたので、IUNS の council member 等に早くから働きかけることができた。

(2) ブースの設営：9月15日、送付物 (段ボール12箱) を無事受け取り、夕方までにセッティングを終えた。中国が大きなモニターでプロモーションビデオを流していることがわかり、日本も急遽モニターを借りることにした。ブースは、パネルやポスターなどのほかに、美しい風呂敷や折り紙などで華やかに飾り付けた。農林水産省から提供を受けた和食についてのパンフレットも用意した (写真2)。



写真2 日本ブースの様子

(3) ブース等での活動：ブースでの活動は16日から18日までの3日間であった。こちらから積極的に声をかけて、熱意を込めて支持を訴え続けた。大学院生にも協力をお願いしブースを盛り上げてもらった。何より有り難かったのは、ブースに立っていただいて、説明や配布に長時間を割いて下さったり、時には折り紙の制作などで場を盛り上げていただいた本学会をはじめとする関係の先生方のご協力であった。特に初日の16日は全員が手探り状態だったうえ、座長をはじめ多くのメンバーがプレゼンのリハーサルのために不在という状況の中、工夫して進めて下さった。

(4) プレゼンテーション：16日のプレゼンは、午後7時からの第1回総会の中で予定されていた。同日は会場近くのホテル内の会議室を借りて、総会出席者を中心としたメンバーでリハーサルを行った。若干時間オーバーをしてしまうので、早口になることは避けるべく、無駄をそぎ落としていった。様々な細かい工夫を加えつつ、4~5時間ほど繰り返し練習を行った。いよいよ総会開始が近づき、会場の入口では3都市が競って各国代表に資料やギフトを配布して支持を呼びかけた。日本からは事前に名簿を送付した13名が出席した。総会の最後に3都市からのプレゼンとなり、まず中国が終わり、次に日本が呼ばれた。プレゼン中に、会場の反応がいいことに気を良くしつつ進む。TCVB担当者による東京の魅力アピールも見事なものであった。途中、清水 IUNS 分科会委員長、宮澤本学会会長、木戸日本栄養改善学会理事長に立って会場に手を振っていただき、そして最後に日本チーム10人がステージ近くで「See You in Tokyo」のボードを掲げるという演出（これは当日のリハーサルで決めた）も決まって、他の2都市より大きな拍手を得られたように感じた。総会後に行われた Speakers Dinner において、数カ国の代表から日本が一番良かったと言っていたのにも力づけられた。

(5) Japan Night の開催：翌17日はブース活動の傍ら、会場の下見等 Japan Night の準備を行った。追加の招待者として適当と思われる方に招待状を渡し参加を呼びかけた。グラナダの街が一望できるレストランでの開催であった。結局日本人以外の参加者は18名と多くはなかったが、IUNS や FANS の主要メンバーに多く参加いただけて、各テーブルの日本人がじっくり語りかけることで、さらに強固な支持をお願いすることができたのは大きな成果だった。また、日本人にはどちらかというと“つて”が少ないアフリカの国から複数の参加者を得られたのも良かったと思われる。WG 座長としてスピーチをする機会を得たが、プレゼンでは出せなかった内容（オリンピック招致の成功の話題や、福島原発に関する懸念に対する説明など）を補足することができた。

(6) 情報収集と戦略の立て直し：ここまでは一見順調のような記述となっているが、実際のところ状況は厳しかった。プレゼンの翌朝から、中国は猛攻撃を仕掛け

てきた。China is ready to host ICN2021 と書かれたエコバックをシンポジウム会場で一斉配布するなど、会場が中国一色となった。そんな中国の積極性を熱意と取る人も多く、逆に日本人の慎重さは、態度が横柄であるという意見もあったと聞いた。日本のブースに来る人の中には（日本人も含めて）、開催国は既に中国に決まっていると思っていたという人が多くいた。票読みをするが、まだまだ足りないと感じ、我々も積極策に出ることにした。まずは、総会の出席者、特に投票権者の情報を得ることに集中した。メールアドレスを調べ、WG 座長から個別にメールを送って支持を要請する作戦を取った。Japan Night の後にも真夜中過ぎの作戦会議を行い、投票日となる翌朝は7時半から学会会場の入口に立って配布物を配ることにした。両学会の会長も自ら先頭に立ってひとりひとりに手渡し、握手をした。誰もが必死であった。

(7) 投票：投票が行われた第2回総会の会場の入口で、日本チーム総出で最後のお願いをした。出席者のほぼ全員と丁寧に握手をして、言葉を交わした。総会への日本からの出席者（敬称略）は以下の通り。加藤久典、門脇基二、岸本良美、木戸康博、熊谷日登美、小西久美子、近藤和雄、清水誠（投票権者）、下村吉治、関泰一郎、高橋令子、戸田加寿子、宮澤陽夫、柳田晃良。投票は最初の議題で、各国の代表者が投票、開票結果が読み上げられた。中国9票、アイルランド13票、日本32票。会場内に大きな拍手が起こるなか、日本チームががっちり握手を交わした。官邸チームにも即座にメールが送られた。

(8) その他：開催地の投票に引き続き、IUNS の officer および council member の選挙も行われた。Council member の定数6名に対して、各国から約20名が残っていたが、投票の結果、本学会会長の宮澤陽夫先生が第2位の得票で選ばれ、2017年まで務められることとなった。なお、第20回 ICN では、ICN Daily News という新聞が毎日発行されていたが、筆者がインタビューを受け、9月20日の紙面に掲載された。

4. 勝因について

今回の勝因は何だったのか、詳細はここでは割愛するが、TCVB の戸田氏による業界団体向け雑誌への寄稿文（「国際栄養学会議2021招致の舞台裏」, MICE Japan 2013年11月号 p 26-28）において詳しく分析されている。項目だけ引用すると、①オールジャパンの体制、②国や開催都市の強力なサポート、③説得力のあるビッドペーパーとプレゼンテーション、④日本の本気度を出して真剣に戦った、とある。上記の報告からそれらを感じ取っていただけると幸いである。

感想として～苦労と喜びと～

以上、誘致の記録として大部分は淡々と書いたつもり

ですが、実際のところは本当に本当に大変でした。以下は裏話として個人的な感想を書くことをお許し下さい。

まず、ICNの誘致については以前から国内関係者の間で話は上がっていたものの、今回IUNSからの連絡から書類の提出まで1カ月しかなく、その間に意志決定、内容の検討、書類作成などを猛烈な勢いで行う必要に迫られました。提出も無理かと思いましたが、関係各位の強力なサポートも得て、何とか提出できたのは幸運でした。例えば東京都知事からのサポートレターは、これまでの最短記録での獲得だったそうで、昨年9月の提出にぎりぎり間に合いました。ですが、この時点では、まあ今回だめでも将来に向けて取りあえず手を挙げておき、次の世代の先生方に頑張ってもらえればという雰囲気がありました。過去のIUNS総会で続けて立候補している国々も今回も狙ってくることは目に見えていましたので、急に出した日本に勝機があるとは思いくく、私自身勝算はせいぜい5%程度かと思っていました（そう言っただけは関係の皆様にも怒られますが）。

3月に3カ国に絞られた中に残ったことがわかり、関係者一同、俄然本気になりましたが、いかにせん情報が入ってこないことに焦り続けました。競合国の中国は、IUNSの理事を出しているため、おそらく日本が最初に提出したbidの情報も掴んでいると考えられました。ダブリンについては、2013年ICNがヨーロッパであることから可能性は低いと考えられましたが、日本は1975年に続き2回目の開催となるのに対し、中国が初開催となることを主張してくるのではと考え、誘致活動の質を圧倒的に高める必要があると気を引き締めました。

慣れない内容の英語をあれこれ書かなければならないことはもちろん大変でしたが、準備期間の終盤になって特に苦労したのは、12th ACN準備の主要メンバーと誘致WGのメンバーがほとんど重なっていたことです。グラナダでACNのセカンドサーキュラーを配布することが決まっていた、それに掲載するために決めなければならないことが山ほどありました。セカンドサーキュラー制作のやりとりも飛び交い、そちらも何とか最後に間に合って、PCOの方に手荷物でグラナダまで運んでいただきました。

首相のレターの獲得も難題でした。なぜ首相からの招請レターが必要なのか、様々な観点からの説明を求められました。丁寧に対応し、現安倍政権になって初の招請レターが発出されたという連絡が届いた時には電話口でガッツポーズを取ってしまいました。

グラナダでも落ち込んだり気後れしたりすることも多くありました。特に投票の前日から積極策に出たにもかかわらず、投票当日は朝から午後まで読める票の数が全く増えない硬直状態になり、直接メールを送った相手から時折「Good luck」という冷めた返事が返ってきて、絶望的になったりしました。また、個人的にはプレッシャーも敵でした。多くの方々の時間や努力や想いが、

また税金や学会のお金が、誘致のために注がれて来たというのは事実であり、期待に応えなければという焦りに押しつぶされそうな時もありました。

しかし、投票の総会会場に入ってくる各国代表の表情や言葉から、私自身は誰よりも早く勝利の感触を掴んでいたかもしれません。握手をしながらハラハラしていたのは確かですが、日本チームメンバーが各国からの参加者と一対一での対話を重ねてきたことが実を結んでいるのを感じていました。誘致のような活動は、結局は人と人との関係なのだなど、投票の結果を待ちながら考えていました。

勝利の瞬間は思わず両手をあげて立ち上がってしまうほど嬉しかったのですが、それまでの過程で嬉しい経験をたくさんさせていただきました。特に、「がんばれ」とか「何でもやるから言って」などと声をかけていただいたり、実際多くの方に献身的にご協力いただいて、このプロジェクトに関わって本当に良かったと思っていました。さらに、TCVB、JNTO、担当PCO、ビデオ制作担当者などの皆様も本当にいい仕事をして下さり、プロフェッショナルの凄さに間近に触れることができたのも良い経験だったと思います。

さて、次は2015年のACNです。多くの日本の研究者が12th ACNにおいて国際会議について十分な経験を積むことでしょう。まず12th ACNを成功させ、8年後につながればと考えています。

最後になりますが、誘致活動を振り返っての本学会会長のコメントを引用させていただきます。「日本人の緻密さ、鷹揚さ、企画力、奥ゆかしさ、結束力、精神力、すべて最高でした。」

誘致WGの先生方には最初のbid paperの作成から成功の間まで本当にご尽力いただきました。特にコア作業グループの皆様には、長時間の打ち合わせを10回以上も重ねたほか、深夜にまで続く大量のメールのやり取り、情報収集から制作物の内容の検討など、膨大な時間を割いていただきました。TCVBの皆様、特に戸田加寿



写真3 誘致成功直後の日本チーム

子様、小西久美子様に御礼申し上げます。JNTOの川崎悦子様、荒井重之様には多方面からのご支援を頂戴しました。日本学術会議 IUNS 分科会の先生方、日本栄養・食糧学会および日本栄養改善学会の関係者の先生方のご協力とご支援にも感謝申し上げます。とりわけ日本栄養・食糧学会会長の宮澤陽夫先生と IUNS 分科会委員長の清水誠先生が、随所で迅速かつ的確なご判断をして下さったことは、常に誘致活動の支えとなっていました。日本栄養・食糧学会の名誉会員や顧問の先生方には貴重なアドバイスや激励を賜りました。学会事務局にも大変なサポートをしていただきました。

また、ブースなどでロビー活動に協力いただいた皆様、総会に出席いただいた先生方、写真やビデオの素材を提供していただいた皆様、ビデオの作成にご協力いただいた皆様、笑顔の写真を撮らせていただいた皆様、Facebookに「いいね！」をしていただいた皆様、その他応

援をして下さった全ての皆様に心から御礼申し上げます。全員のお名前を挙げることはできませんが、参議院議員武見敬三先生、福留奈美様、末富康雄様、高橋祥子様には、格別のご配慮を賜りましたことを深謝致します。制作物の作成にあたり、文部科学省大臣官房総務課広報室、農林水産省大臣官房政策課食ビジョン推進室、台東区教育委員会学務課、女子栄養大学入試広報センターの皆様にも資料の提供やご協力をいただきました。なお、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会の活動を勝手に参考にさせていただきましたので、密かにお礼を申し上げたいと思います。

今回の招致成功は、ある意味で奇跡だったと思っています。奇跡を起こすには、たくさんの皆様方のご援助のひとつでも欠けていたら不可能であったと思っています。これからのご支援・ご指導もお願いして報告とさせていただきます。